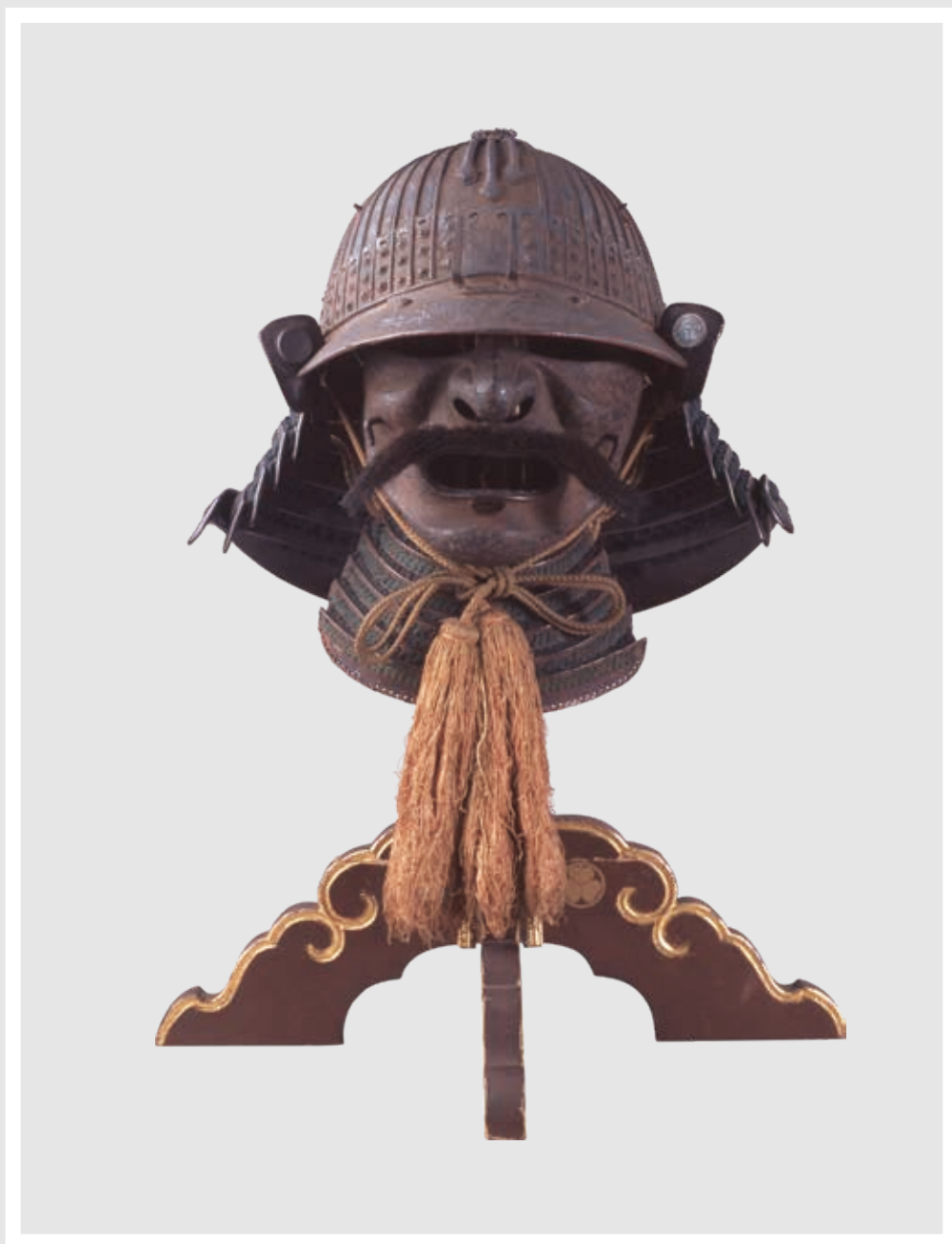


岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

104
AUTUMN
2025

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



多史済々 ― 天下人の交差点

クロスロード

湯谷

翔悟

会場 豊橋市美術館
会期 令和7年12月13日(土)・令和8年1月25日(日)

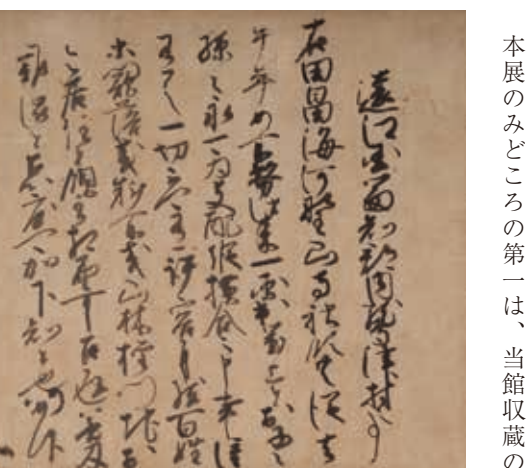
はじめに

まず大事なことを先にお伝えしておきます。

本展は、豊橋市美術館で開催します。くれぐれもお間違えのないよう、切に切にお願い申し上げます。

この展示をものすごくざっくり申しますと、吉田藩（豊橋市）の儒者・大田錦城が言った「三河武士が二度天下を獲った」という卓見を、当館で収蔵する中世・戦国時代の資料から見えていくということになるでしょうか。三河という地の特質を、資料から辿っていきます。以下、本展のまどろこ・ねらいをお示しして、その後章構成と特徴的な出品予定資料をご紹介します。

本展のまどろことねらい



画像1 徳川家康判物（当館蔵）

本展のまどろこ第一は、当館収蔵の家康文書の全点公開です。一六点、全て花押や判が据えられた、もしくは家康自筆と伝わる、写ではない正文です【画像1】。今回、これをひとまとめで展示します。普段ですと歴史の流れに合わせてバラバラに展示されること多いですが、一か所に展示することで、花押や署名の位置、紙質の変化などを比較することができ、こうして展示ができるのは、三河・岡崎ならではだと思います。

一方で家康文書をひとまとめにしたのは、別のねらいもあります。それは本展のテーマ「多史済々」は、言うまでもなく多士済々をもじったものです。これは三河・岡崎の歴史の多彩さをイメージして付けました。ともすれば家康ばかりに注目が集まってしまうがちですが、三河の歴

史はそれだけではありません。東と西の中間点、時には境目となった三河の地理的特質は、足利・今川・豊臣政権など、中世戦国時代を語るうえで欠かせない人物が活躍する舞台となる必然性を備えていました。そうして紡がれた多彩な歴史を、家康を前置する一敢えて埒外におく・相対化する一ことで際立たせることを目論んでいます。

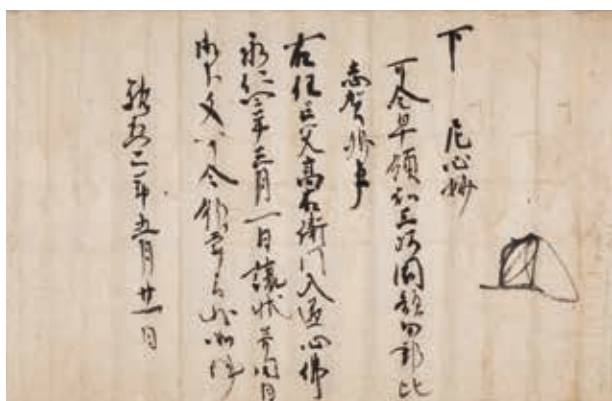
また、新発見の古文書を本展で初公開いたします。本来なら県指定文化財の大樹寺文書に収められていたはずのものです。たゆまぬ博物館の活動のなかで、また市民の方々のご理解とご協力により、新発見が相次いでいます。その一端をぜひご覧ください。

展示のくみたち

本展は最初に家康文書を一堂に紹介したあと、概ね時代順に資料をご紹介します。一章は足利氏と三河の関係についてです。一四〜一五世紀の時期です。ここでは何といっても、総持尼寺に伝わる足利氏および室町幕府管領から出された古文書を欠かすことはできません【画像2】。総持尼寺は、足利氏の飛躍を支えた高氏の菩提寺です。

三河は足利義氏が鎌倉時代に守護に任じられて以降、足利氏の拠点となりました。それは大田錦城も言っているように、吉良・今川・一色・細川などといった、足利一門の名字が、三河の地名に由来していることからうかがえますし、室町幕府成立までの過程で、足利氏にとって三河が防衛ラインとなっていることにも見出せます。

幕府成立後も、三河は足利氏の直轄地（御料所）・直属軍（奉公衆）が多く存在する、重要な拠点であり続けました。それを現地で管理していたのが、三河武



画像2 足利直義袖判下文（総持尼寺蔵）



画像4 四十二間筋巻込唐草象嵌兜（法蔵寺蔵）部分

松平家はその後家康が誕生し、天下人になっていきます。その過程で減ってしまった、または敵対していた家の資料はなくなっていました。また、不都合な家の歴史ということで抹消や改変されている場合も多くあります。そのため、実際の歴史が分かりづらくなっています。これも三河の歴史を見ていく上での難しさであり面白さとも言えます。

士と呼ばれることになる在地の人びとです。三河は中央から離れていながら、直轄地や直属軍を介して、中央とのパイプが多く存在していました。それを活かして台頭したのが松平氏でした。松平氏は一五世紀に入ってから、ようやく活動が確認できはじめる、いわば新興勢力です。そんな松平氏が頭角を現すことができたのは、幕府の財政を扱う政所のトップ（執事）の伊勢氏と、直轄地の管理を通じて関係を有していたことが、要因の一つであることは間違いありません。また松平親忠の五男の超誉存牛【画像3】が後柏原天皇の臨終導師を務めるなど、仏教を介した朝廷や京との関係構築も見逃すことはできません。加えて、有力な家が多数存在する地であるがために、かえって絶大な力を有する家が成立しにくかったことも、松平氏台頭の要因となったといえます。



画像3 超誉上人像（信光明寺蔵）

さいごに

注目されます【表紙画像】。長篠の合戦の頃に家康が奉納したという伝来は検討が必要なもの、銀象嵌が施され、小田原鉢と呼ばれる兜でも屈指の出来映えを示しています【画像4】。また同じく法蔵寺に伝わる豊臣秀吉・秀次の文書や、田中吉政判物（松應寺）など、これまで展示の機会が多くなかった、豊臣政権と岡崎の関係を示す資料をご覧ください。

最後に、天下人家康との由緒をもつ寺社に伝わる名品を厳選してご紹介します。この中には伝来通りに考えて良いか判断に悩む資料もあります。しかしそうした伝来伝承が形成された理由を考えることにこそ、こうした資料を見る意味があると言えるでしょう【画像5】。



画像5 鶯文堆朱盒子（大樹寺蔵）

本章ではそうした歴史の流れを受けて、資料の伝来が多い、家康に連なる安城松平家に関する資料を軸にして、西三河の周辺の勢力にも目を配っていきます。

三章は家康が三河を統一した以降の歴史を見ていきます。ただ、家康が拠点を東に移したことも影響してか、この時期を物語る資料は、収蔵品中には多くありません。しかし、その中でも、法蔵寺に伝来する四十二間筋兜は、近年の再調査により評価が高まっており、資料の伝来が多い、家康に連なる安城松平家に関する資料を軸にして、西三河の周辺の勢力にも目を配っていきます。

以上簡単ですが、本展の構成と資料を紹介してきました。皆さまお気づきのとおり、家康を相対化すると言いつつも、最後は家康に拠った展開になっています。しかしこれこそがこの地域の歴史と資料の特徴かもしれません。家康が三河を統一した唯一の戦国大名であり、さらには神君が誕生し雄飛した地という特質は、もはや三河を考える上では逃れることができない事実です。本展は、家康が天下人になることができたその遠因を、三河の歴史に求めてみようという試みでもあります。足利氏が拠り所とし、織田と今川が鎬を削り、秀吉が勝利して得た、そして家康が誕生し雄飛したのが三河です。彼らの思いが交差したこの東と西の間点の特性を、当館収蔵品という限られた資料からではございますが、少しでも感じていただければ幸いです。

なお豊橋市美術館様には、当館の工事における資料の保全のために、多大なるご高配を賜っています。本展はそのような館どうしの交流を示すものでもあります。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

収蔵品紹介

特集 美博の中のアジアー愛知・名古屋2026大会に向けてー

歌川芳重《東海道五十三駅鉢山図絵 藤川》 嘉永元年（一八四八）

①

酒井 明日香

来年二〇二六年の九月から十月にかけて、当館が立地する岡崎中央総合公園が、第二十回アジア競技大会（2026／愛知・名古屋）・第五回アジアパラ競技大会（2026／愛知・名古屋）のうち、アーチェリーをはじめ複数の競技の会場になります。そこで、大会に向けたアジアフレンドシップ事業の一環として、「美博の中のアジア」と題し、アジアに関連のある収蔵品を何回かに分けてご紹介します。

* * *

画面の中央に、黒く大きな山がそびえ立っています。山の中央を通る一本道の道端には、茅葺屋根の建物が四棟点在し、建物横の木には白い花が咲いています。山裾には樹木が生え、白い砂利が広がっています。さらに画面下側に描かれているのは、茶色の鉢。これまで見てきた山や樹木、建物は、すべてこの鉢の中に収まっていることがわかります。

本作品は、木村唐船作・歌川芳重画『東海道五十三駅鉢山図絵』（以下、『鉢山図絵』）に収録されている一点です。「鉢山」は石や植物の自然物と人工物を鉢の上に配置し、どこか特定の景観を表現したものとされています。今でいう、ジオラマが似たものでしょうか。同書には、東海道の各宿場の名所



歌川芳重《東海道五十三駅鉢山図絵 藤川》

を木村唐船（生没年不詳）が鉢山で制作し、その鉢山を歌川芳重（生没年不詳）が描いた図が掲載されています。本作品には、「藤川」の宿場名と、青背景に白文字で「山中」の記載があります。藤川宿の東にあり、中世の宿駅として知られた山中（現在の岡崎市舞木町・羽栗町・山綱町・本宿町・池金町・鉢地町あたりか）の風景の鉢山であるとわかります。さて、この鉢山なるものの起源は中国にあります。

中国文化の影響を受けて、日本では文化五年（一八〇八）に、中国風の景色の鉢山を収めた『占景盤』が、文政九年（一八二六）には増補版の『占景盤図式』が刊行されました。『鉢山図絵』の鉢山の制作には、特に『占景盤図式』を参考にしたと思われる図が多くあることが先行研究で明らかにされており、『鉢山図絵』の制作背景には、中国舶来の文物を愛好する「唐物趣味」があったと考えられています。

日本古来の美術工芸品には、中国やアジアの影響を受けたものが数多く存在します。そして影響を受けるだけでなく、唐物そのものも、いつの時代も珍重されてきました。例えば、室町幕府の歴代将軍が収集した美術工芸品のコレクション「東山御物」には、宋や元など中国王朝の美術工芸品が並びます。また江戸時代には、詩や絵画など中国文化に造詣の深い教養人である文人が活躍し、町人にも唐物を愛好する嗜好は広がっていました。

さらに、『鉢山図絵』の制作背景には、このような唐物趣味に加えて、歌川広重（一七九七～一八五八）の東海道五十三次からの影響も指摘されています。石の配置、鉢の模様や形などは『占景盤図式』を参照した作品がある一方で、各宿場のモチーフは、広重の各種の東海道五十三次と『鉢山図絵』で多くの類似点があることがわかっています。中国の文化に影響を受けながら、鉢山の景観を、当時日本で流行していた東海道五十三次に独自に置き換えていった点が、『鉢山図絵』の特徴と言えます。



図1 歌川広重《東海道五十三次之内 藤川》（行書版東海道）
天保14年～弘化5年（1843～1847）
三河武士のやかた家康館『特別展図録 藤川宿
—浮世絵と風景—』平成10年、p.6から引用



図2 歌川広重《東海道 世八 五拾三次之内 藤川》（有田屋版）
天保14年～弘化5年（1843～1847） 当館蔵

しかし、『鉢山図絵』全体としては『占景盤図式』の鉢山や広重東海道との図像の類似が指摘されていますが、藤川宿の図に限ると、これらの特徴は実は見だされていません。『鉢山図絵』以前に刊行された広重の東海道五十三次のうち、行書版東海道（図1）、狂歌入東海道、有田屋版（図2）などは、山の中からはわからない作品もありますが、山あいの町並みがモチーフとして選ばれています。これらの作品で描かれた山里の風景が、おそらく『鉢山図絵』制作の念頭にあったのではないかと想像されます。しかし、参照している作品を具体的に言い切るのには難しいところです。『鉢山図絵』全五十六図のうち、広重東海道との類似点が認められない作品は十一図、さらにそのうち、本作品と同様に『占景盤図式』との類似点も見だせない作品は五図に限られます。藤川宿の鉢山の造形は、『鉢山図絵』全体の傾向にあてはまらない少数派と言えます。広重の東海道の図像以外にも、鉢山の形を決めた要因があるのではないかと考えられます。

参考文献

新井ゆい「木村唐船作、歌川芳重画『東海道五十三駅鉢山図絵』研究—上方の広重需要と唐物趣味—」『日本近世美術研究』第二号、北島古美術研究所、二〇一九年

明大寺町の飛び地

安本 翔音

名鉄東岡崎駅周辺は岡崎市の中心地として賑わっていますが、この駅周辺の住所は明大寺町、上明大寺町、明大寺町となつています。現在の明大寺町は東岡崎駅周辺や裏手の六所神社、龍海院から岡崎高校を越え、イオンの北東あたりまでが、その主たる町域です。ただし、よく見てみると、少し離れて南にも明大寺町字兎ヶ入、大塚とあり、飛び地があることがわかります。なぜ、この離れたところも明大寺町なのか。言われてみれば少し気になりますか。そこで今回はなぜ明大寺町には飛び地があるのか調べてみました。

* * *

明大寺は中世より「妙大寺」と見え、鎌倉街道の通る町として栄えていました。現在の東岡崎駅東口ロータリーのあたりには、中世、西郷氏によって館が置かれていました。また、六所神社北の周辺は高宮郷ともよばれ、裏手の山も含めて六所神社領、龍海院周辺も龍海院領と、寺社領も広がっていました。明大寺は上・下に町が分かれますが、前者は現在の上明大寺町、後者は明大寺本町と概ね合致すると考えられます。

さて、ここまでは東岡崎駅周辺の話になりますが、明大寺の丘陵以南についてはどうだったのでしょうか。近世の状況がわかるものとしては、近世後期に菅生天王社の神主であった加茂久

算が岡崎周辺を調査し、編纂した『三河聡視録』⁽¹⁾があげられます。ここには明大寺町の歴史や地名が記されていますが、畑や畠の地名を見てみると、東岡崎駅周辺だけではなく南側の地名（奈良井、兎ヶ入など）も見られます。現在明大寺には属さない竜美地域も含まれており、谷あいには田畑が広がっていたようです。また、「林八町歩程、南は戸崎村御林界、東は大岡越前御領分界なり」とあり、戸崎や大平に接する南東、つまり大塚あたりは林だったようです。明大寺の北側は主に街として栄え、南側は山林や田畑が広がっていたのです。

また、昭和初期の土地宝典⁽²⁾には、現在の明大寺町、上明大寺町、明大寺本町、東明大寺町、竜美北・中・南・西、乙川の北岸の朝日町あたりが明大寺町となっています。これは江戸時代後期の町域と概ね一致していると考えられます。竜美地域は奈良井、道城ヶ入、坂下などの字名で明大寺町であり、ここに接する字兎ヶ入、大塚はこの頃は、飛び地ではなかったようです。

* * *

では、「竜美」という新しい町はどのようにしてできたのでしょうか。

人口の増加などから、戦後以降、岡崎市では丘陵地を中心に住宅地化がすすめられました。明大寺についても戦後から開発がおこなわれ⁽³⁾、昭和四十

年（一九六五）からは岡崎市竜美ヶ丘土地区画整理事業によって、大平町にも跨って、山や田畑が住宅地として整備されました。施行面積は約千七百km²にも及びます。工事中には、大岩や、大水による土砂流れによって度々難航しながらも、二十三年かけて整備が進められました。このようにして新しく整備された地域が竜美という名前に変わりました。なお、「竜美」の名は岡崎城の別名「竜城」の辰巳の方向にある丘陵地帯であることが由来なようです。

* * *

まとめると、字兎ヶ入、大塚は竜美ヶ丘の整理事業に入らなかったため、明大寺町に残ったといえそうです。つまり、元々は飛び地ではなく、昭和後期の土地開発により、竜美ヶ丘が明大寺から分離したことから「飛び地」となったと表現するのが相応しいといえます。

町の形は行政上の区域でもあります。その区域はさまざまな歴史を経て今のものとなっています。町のちよつとした疑問から歴史を調べてみると面白い発見があるかもしれません。

註

(1) 加茂久算『三河聡視録』（国立公文書館蔵）

(2) 『岡崎市土地宝典』（大日本帝国市町村地図刊行会、一九三三）

(3) 『新編岡崎市史 史料現代』（新編岡崎市史編集委員会、一九八三）、「竜美ヶ丘」（岡崎市竜美ヶ丘土地区画整理組合、一九八九）



昭和8年の竜美ヶ丘周辺
『岡崎市土地宝典』（当館蔵）



昭和8年の明大寺町
『岡崎市土地宝典』（当館蔵）



現在の明大寺町
（国土地理院地図より筆者が作成）

ARTISTALK は、地域の美術作家に学ぶ員がインタビュ形式で制作活動についてお話を伺っていく企画です。第二回目で紹介するのは、現在岡崎市明大寺町にある「Studio Mukaiyama」でアーティスト・レジデンスをしている、スイスカラ来たシモーネ・ニコラ・フィリッポさん (Simone Nicola Filippo) です。

シモーネさんは八月に名古屋のギャラリィで行われた筆者のトークイベントでお会いし、岡崎市内でレジデンスをしていることを知って驚きました。シモーネさんはスイスを拠点に活動する画家およびビジュアルアーティストです。イタリヤで生まれ、その後スイスに転居しジュネーブとローザンヌの美術学校で学びました。

Q. どのような経緯で、どれくらいの期間日本でレジデンスをしているのでしょうか？

A. 私はこれまでローザンヌやカイロ、メキシコシティでレジデンスをしてきましたが、今回のレジデンスは知人の紹介



Simone Nicola Filippo
(2025/9/3 Studio Mukaiyama にて)

です。スイスで活動するセラミック・アーティストで友人の Emi Agathe Nügi が誘ってくれました。彼女はここ岡崎市にある祖父母の家をレジデンススペース「Studio Mukaiyama」として活用しています。私は七月に初めて日本に来て、十月まで三か月滞在する予定です。

Q. これまではどのような制作活動をしてきて、最近はどういう作品の発表をしましたか？

A. 私はバラソールという趣味があり、ゲームやアニメ、映画のキャラクターなどをモチーフに、それらに抱く愛情や親密感、孤独感や喪失感をテーマに制作してきました。今年の春にスイスのラ・ショー・ド・フォンという小さな町の屠畜場だった施設で「Jouir Bonheur (幸せの塔)」という展覧会を開催しました。そこには動物を天井から吊って移動させるためのレールが付いているのですが、それを活用して壁のないところに絵画を展示しました。《I got that Phazon Fever》は絵画の画面を壁の方に向けて展示し、ギャラリィと違って作品が全体に見られるのではなく、見る人が作品と壁の隙間に入って絵を見るという仕掛けを行いました。

Q. それはゲームやアニメや映画が、個人的で閉鎖的な環境で楽しめるもの、というところを、展示環境で再現しているのですか？

A. そのような密接な関係はあります。私が考えたのは、見る人が作品を引いて見ることができない環境であり、作品の裏から離れて見ている人は、画面を見ている鑑賞者と作品の関係が見えないということ。デジタル・コンテンツは宗教的、象徴的なものに触れる美的感覚と、ア



《I got that Phazon Fever》
2023年 / 油彩、キャンバス / 150 × 100 cm



《I got that Phazon Fever》の
展示風景

イデンティティに関わる深い次元に私たちを誘い込みます。

Q. 現在のレジデンスではどのような作品を制作されていますか？

A. 水墨画用の和紙に墨汁で人物を描いたり、漫画雑誌やコミックの紙にキャラクターを描いています。先週は大阪にリソグラフという印刷技法で作品を出力してきました。

Q. 日本では、制作活動の他にどのような

に過していますか？

A. 岡崎にあるブックオフはとても品揃えが多くて面白いです。ウマ娘とエヴァンゲリオン、フィギュアを安く買いまいた。また昨日はイオンモール岡崎で映画「8番出口」を見ました。日本語は分かりませんが、内容は理解できたので面白かったです。

Q. 今回の滞在中に日本で作品を発表する予定はありますか？

A. 十月四〜十一日に常滑の「よもぎゲストハウス」で作品を発表する予定です。それと、ここ「Studio Mukaiyama」の近くにある岡崎市美術館で開催される「第七十八回岡崎美術展」という公募展を見つけたのですが、作品の規格と搬出作業についての条件が合えば応募してみたいと考えています。

日本の文化と親和性のある作品を手掛けるシモーネさん。今後の活動をチェックして、楽しみにしたいと思います。



レジデンスにて制作中の作品の一部

こども学芸員@家康館 開催報告

山下 葵

八月九日(土)～十一日(月・祝)の三日間で「こども学芸員@家康館」を開催しました。本イベントは小学校四年生から六年生を対象とし、学芸員のさまざまなお仕事を体験するイベントです。多くの子どもたちに美術館・博物館で働く学芸員の仕事を体験することを通じて、より一層美術館・博物館に興味をもってもらうことを目的としています。

昨年度からはじめた「こども学芸員」は今年で二年目。今年度は当館が改修工事を行っているため、岡崎城公園内の三河武士のやかた家康館を会場にして実施しました。今回は市内外の小学校四年生、五年生の五名の児童が参加してくれました。三日間のこども学芸員の活動内容をご紹介します。

◆館内を探検！

家康館のバックヤードを見学しました。家康館の常設展示室の裏側や、収蔵庫へつながる搬入ルートなどを、家康館の学芸員から解説を受けました。いつもは入れないところに入れるとあって、こども学芸員はみな興味津々でした。

◆歴史資料の取り扱いを体験！



収蔵庫の扉の前で、博物館の収蔵施設について学ぶこども学芸員。
厳重に鍵がかけられていることや、二重扉になっていること等を学びました。

練習用のレプリカや職員の私物の掛軸・卷子に実際に触れ、取り扱い方を学ぶ体験を行いました。掛軸は桐箱から取り出し、紐をほどき、矢筈と呼ばれる高いところに掛軸を掛けるために使う棒を用いて掛軸を掛けます。掛軸を掛けるだけでなく、巻いて箱の中に片付ける作業にも挑戦しました。

桐箱に入った掛軸を机上に出しただけで、こども学芸員たちは大歓声。初めて触れる歴史資料に緊張しながらも、丁寧に取り扱い扱ってくれました。



掛軸を巻くこども学芸員

◆むかしの教科書を

展示してみよう！

明治時代の小学校の教科書六冊を用いて、展示ケースにどのような配置するかを、こども学芸員五人全員で考えました。

「実際に教科書を使っている感じを出したい」という意見が出たことで、試行錯誤の結果、二冊だけ開いて斜めに配置するという工夫をしました。



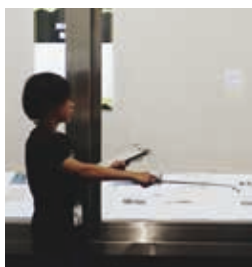
こども学芸員による教科書の展示

◆ギャラリートークに挑戦！

こども学芸員の三日間の集大成として、ギャラリートークを行いました。家康館で開催していた企画展「岡崎城公園一五〇年のあゆみ」(会期…令和七年七月十二日～九月七日)で展示されている資料の中からお気に入りの資料をひとつ選び、それについて解説を行うという活動です。

一日目で展覧会を観覧し、お気に入りの一点を見つけます。二日目で選んだ資料について調べ、ギャラリートークで発表する原稿を作成します。三日目には、発表の練習を行い、お互いに良かったところやもっと良くなる方法をアドバイスしました。

五人とも全く違う資料を選び、保護者の方々やお客様に対してわかりやすく解説を行いました。



こども学芸員による
ギャラリートークの様子

こども学芸員を開催してまだ二年目ですが、毎回参加する子どもたちの柔軟な発想力と、思わぬところに興味を持つアンテナに驚かされます。そして、学校も学年も異なる子どもたちはすぐに打ち解けて、楽しみながら活動に参加してくれました。そういった子どもたちの姿にわたしたち職員も刺激を受け、職員にとっても学びのある三日間となりました。

来年度以降も夏休み期間にこども学芸員の開催を予定しています。学芸員の仕事を体験することを通じて、学校では知ることができないことを学び、子どもたちの世界が広がっていくことを願っています。



LETTER

「映画のはなし」

最近わたしの心を鷲掴みにしているフランス・ヌーヴェルヴァーグの映画監督エリック・ロメール（一九二〇〜二〇一〇）。彼を知ったのは、「レネットとミラベル／四つの冒険」（一九八七年）で、タイトルのとおり四つの短編「青の時間」「カフェのボーイ」「物をい、窃盗常習犯、女詐欺師」「絵の売買」で構成されている。私はこの作品の第一部「青の時間」ですっかりロメールの作り出す世界観の虜になってしまった。物語は、田舎育ちで自然を愛する純朴な少女レネットと、都会育ちで現実的な学生のミラベルが会うところから始まる。仲良くなった二人は、一緒に「青い時間」を体験する。「青い時間」とは、夜明け前、夜の鳥たちが眠りにつき、昼の鳥が目覚める前のはんの一分程度の沈黙の時間のことである。詩的で神秘的な美しい時間。そしてとても儚く一瞬の軌跡のような時間が繊細に切り取られている。

この体験に対する二人の感性の違いや、活き活きとした会話の中で生まれる二人の衝突は、コミカルなコントラストと核心に迫るような気づきを生み出している。その後、続く短編でも、正反対の二人の何気ない会話を通じて哲学的・実存的な問いを鑑賞者に投げかけている。

ロメールの映画が素晴らしいのは、ウィットに富んだ会話だけでなく、画面全体を彩る色彩の美しさである。魅力的な衣装や小道具もまた目を見張るものがある。「緑の光線」（一九八六年）や「パリのランデブー」（一九九四年）など他にもご紹介したい作品は盛りだくさんだが、またの機会に譲りたい。

まだまだ残暑の厳しい夜のおともに、繊細で美しいエリック・ロメールの世界を堪能してみませんか？（田中）

先にお伝えしておきます。

ヒマじゃないよ!!!!!!

：失礼しました、ふう。

「休館だからヒマでしょ、良いねえ」とちょくちょく言われますが、次年度以降の展覧会準備など、普段どおりの仕事にプラスして、工事に関係するあれやこれやに対応するので、工事の方が例年より忙しいです。博物館業界以外の方に言われるのは納得して、「そんなことないですよー」って笑って返せるのですが、同業者の、しかも同じ苦しみを味わったことがあるはずの人にも言われるのはなぜでしょうか。解せぬ。

しかも気づけば、豊橋市美術館で展示していたので、実質展示も一本抱えているみたいなのでした。しまったしまった鳥倉千代子、時間が足りぬ。

この展示、最近できていなかった当館の収蔵品ご開帳となります。（岡崎）美博の資料の（豊橋）美博主催による、（豊橋）美博でやる展示です。ややこしいですね。（岡崎）美博では展示しませんので、間違つて（岡崎）美博に来られる方がいないようお願いばかりです。くわばらくわばら。

忙しいとはいえ、展示がない今のうちに、史料と向き合つてインプットをしつかりやろうと思つていた時期が私にもありました。

しかし何だか、今年度は頼まれ仕事が多すぎた。矢張り皆さんヒマだと思ひなんでしょうか。今年が前厄なので厄祓いに行ったのですが、どうも厄を祓うと、代わりに役がやってくるようです。もつとちゃんとスケジュール調整しておくべきでした。困った困ったこまどり姉妹。というところで、もう一度言っておきます。

ヒマじゃないよ!!!!!!

以上、半ば自業自得という話でした。失礼しました、うう。。。（湯谷）

今なにしているの？ その4

現在、美術館は昨年の秋から始まった工事休館の真っ只中。今年の春に美術館に着任した筆者ですが、着任当初は工事によって鳴り響く騒音や振動に随分と驚かされました。何しろ、電話の音はおろか、隣のデスクに座っている方の声さえも聞こえない状態で、一体どうしたものかと頭を抱えました。ですが、そんな騒音も最近では最初の頃ほど気にならなくなってきました。人は環境に適応する生き物だといいますが、慣れというのは怖いものだなあとしみじみと思う、今日この頃です。

さて、工事休館中の美術館で我々職員がどのようなことをしているかを紹介する本コーナー。ただでさえ「学芸員ってどんなことしているの？」と聞かれることが多い職です。まして休館中だなんて、いったい何をしているのだろう、という疑問が生じるのは当然でしょう。そんな声にお応えしまして、まだまだ新米職員としての勉強の日々ではありますが、惜越ながらその日々の業務の一端をこちらでご紹介させていただきます。

現在、当館では豊橋市美術館での展示に向けての準備をしておりますが、その中に、資料の点検という重要な業務があります。豊橋市美術館への資料の輸送に際し、何か問題があったときにわかるよう、現在資料がどのような状態であるのかを、一点一点丁寧に確認しております。

この点検作業を先輩方と一緒にやっているわけですが、これがまあ大変。本当に大変。精神をすり減らし、目を酷使する作業が一日中続き、しかも点検を行わなければいけない資料の点数もかなり多い故にそれが何日間も連続で続く。帰宅する頃には身体がありとあらゆるところから悲鳴があがっております。もはや寝ることしかできない。猫の手も借りたいとはまさにこのことだと思ひます。

「休館中だから、お暇でしょう？」という言葉が聞こえてくることもあります。声を大にして言わせてください。「そんなことはない」と。（井原）

表紙画像：四十二間筋巻込唐草象嵌兜（法蔵寺蔵）



岡崎市美術館

設備改修工事のため、岡崎市美術館は令和8年6月末（予定）まで休館いたします。

H P

<https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA

OKAZAKI CITY
MUSEUM
NEWS

【岡崎市美術館ニュース／アルカディア】 第104号 2025年10月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）